様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６７１５

研究課題名（和文）バウムガルテンの「美的／感性的真理」――芸術に固有の真理の成立とその継承

研究課題名（英文）The concept of "aesthetical truth" in Baumgarten's aesthetic

研究代表者
桑原　俊介（KUWAHARA, Shunsuke）

上智大学・文学部・助教

研究者番号：３０７３５４０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、美学の創設者であるバウムガルテンにおいて新たに提起された「美的／感性的真理」の成立条件を、広範な哲学史的・思想史的文脈のもとで再構成することを目的とする。研究の結果、（１）学問における真理条件が、伝統的な論理学的・論証的真理から、確率・統計に基づく蓋然的真理へと拡張されたこと、（２）存在論的真理が、現実的真理から可能的真理にまで拡大されたこと、（３）ルネサンス以降、論理学と弁論術が統合され心理主義的論理学が成立したことなどが、その成立条件の主たる哲学史的・思想史的条件となったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の最大の学術的意義は、18世紀中葉における美学の成立条件のひとつである、感性や美に固有な新しい真理概念の成立条件を、従来の研究には欠けていた広範な哲学史的・思想史的文脈の下であらたに再構成した点、さらにはそれを、伝統的な真理の三分類（一致説・整合説・明証説）に則して体系的に整理し直した点にある。美学の成立は、今日のわれわれが親しんでいる近代的な芸術概念の成立条件のひとつとなったが、その意味でも本研究は、近現代の芸術のあり方を、その歴史的成立条件から根本的に考え直す視点を与えるといった点において社会的意義を有するといえる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to reconstruct the broad historical, philosophical context which enabled A. G. Baumgarten (1714-62), the founder of the modern Aesthetics, to establish the new category of truth: “Aesthetical Truth”. In conclusion, this study reveals tree critical factors. (1) The expansion of the philosophical truth from a strict logical, argumentative truth to the so called “probabilistic truth” based on the new mathematical, statistical truth in the middle of the 17th century, (2) the shift of the condition of the “ontological truth” from reality to possibility and (3) the integration of logic and rhetoric in the early Renaissance which led to the reconstruction of a new type of logic in the 16th century: the “psychological logic”.

研究分野：美学

キーワード：美学　バウムガルテン　美的／感性的真理　真理　論理学　詩学　弁論術　フィクション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

美学の創設者である A・G・バウムガルテンは、美・芸術・感性を対象とする新しい学問として「美学」を創設し、美学を、真理命題から構成された学問として基礎づけることを試みた。それが可能になるためには、少なくとも、従来の学問においては厳密な真理性が認められてこなかった「感性」に対しても一定の真理性が認められる必要がある。実際にバウムガルテンは、従来の真理概念とは質的に異なる「美的／感性的真理（veritas aesthetica, die ästhetische Wahrheit)」を提唱し、美学をそこに基礎づける。

（１）むろんこのことは、従来の研究でも一定程度指摘されてきた事実である。だがそこでは、このような新しい真理概念が提唱・承認されうることを可能にしたさらに広い歴史的条件が十分に研究されることはなかった。美学が提唱される直前の 17 世紀とは、学問全体が自らの方法論の見直しを中心として近代化を遂げた、学問それ自体の変革期であり、ある知識が学問的に真なる知識であるために要請される真理概念――真理の条件ないしその形式――に大きな変革のあった時代である。その意味でも「美的／感性的真理」という新しい真理概念の成立も、このような、大規模で根本的な真理概念の地殻変動のもとで捉え返される必要がある。

（２）また、バウムガルテンの美学の後代への影響についても研究が十分とはいえない。一般にバウムガルテンの美学の影響は、「美学」という学問名・その理念の継承にとどまり、その“内容”の継承は「断絶」として否定されてきた。彼の美学は、伝統的な詩学や弁論術の技法に従う啓蒙主義的で合理主義的な規則に基づく学問とされるが、かかる美学は、18 世紀後半以降の天才概念を中心とする新たな美学によって否定されたとされる。だがそれは事実なのか。従来の研究では、バウムガルテンの影響として、著名な哲学者の言説に即してのみ検証が行われてきたが、例えば、一般的な大学の講義として、あるいは当時の雑誌媒体などにおいて、美学がどのように講じられ論じられていたのかといった、より一般的で実践的な受容の側面を捉えるにはいたっていなかった。

２．研究の目的

そこで本研究では、（１）17 世紀から 18 世紀中葉にかけての学問的方法論の再編に伴う真理概念それ自体の変容という時代背景の下で、この変容が、「美的／感性的真理」という新しい真理概念が生じるためにどのような条件を構成したのかという問題を、真理概念の刷新に関わる広範な歴史的思想配置に即して捉え返すこと、さらには（２）その後代への影響関係を、大学での講義や雑誌媒体などの実践的な記録に基づいて検証し直すこと、この２点を目的とする。

３．研究の方法

（１）17 世紀の真理概念の変容の実態を正確に把握するために、本研究では、一般的に承認されている真理の３分類のもとで、真理概念の変容を体系的に捉えるという方法を採用した。その３分類とは、①真理の一致説（対応説）、②真理の整合説、③真理の明証説である。アリストテレス以来の真理概念は、中世全体を含め、①の一致説を基礎としたものであったが、それが 17 世紀に入ると、②や③の真理説などの新しい真理説が提唱されるようになる。これら３種類の真理概念の区別に即して、バウムガルテンが提唱した「美的／感性的真理」という新しい真理概念の歴史的可能性の条件を再構成することが、基礎的な方法論となる。

（２）バウムガルテンの美学が提唱されて以降のドイツ語圏の主要大学の講義記録を可能な限り渉猟し、実際的な講義の内容を現地のアーカイヴ等を利用して実地調査するという方法を採用した。

４．研究成果

（１）まずは、学問において要請される「真理」が、17 世紀中葉以降、厳密な論証的真理から、歴史的事実や確率に基づく「蓋然的真理性（die wahrscheinliche Wahrheit)」（蓋然性、真実らしさ（probabilitas, verisimilitudo））へと拡張された事実に着目し、この拡張がいかにして「美的／感性的真理」の成立を可能にしたのかを検証した。「蓋然性／真実らしさ」が、17 世紀中葉以降の「確率論革命」（ハッキング）を通じて、質的概念から量的概念へと変化し、この新しい真理概念が、数理論のみならず、論理学にも組み込まれ、新たにそれが「蓋然性の論理学」として整備されたことが、バウムガルテンの「美的／感性的真理」の成立条件となる。このことはすでに以前の研究にて論証したが、本研究を通じてさらに、とりわけフィクション論における「真実らしさ」の概念が、17 世紀から 18 世紀にかけて、真理の一致説から真理の整合説に基づく概念へと変容を遂げた事実が明らかとなった。具体的には、17 世紀フランス古典主義演劇理論では、上演内容と、歴史的事実や観客の信念との一致という、伝統的な真理の一致説に基づく「真実らしさ」概念が前提とされたが、18 世紀前半のスイス派における「真実らしさ」は、詩（演劇）の個別的な内容と、それがそこで生じるひとつの独立した虚構世界を構成する固有の規則や条件との一致、およびその世界に属す他の構成要素との無矛盾を条件とする整合説に基づくものに変化したことを論証した。むろんその理論的背景には、ライプニッツ

の可能世界論があるが、バウムガルテンの「美的／感性的真理」もこのような可能世界論に基づく真理の整合説を前提とした「真実らしさ」に基づくものであること、さらにそこには、古代ギリシアの叙事詩、中世騎士道物語といった、人々に伝統的に継承されてきた「詩的虚構世界」との整合性という新たな側面も理論化されていることなどを明らかにした（論文：『シェリング年報』2017 年）。

（２）以上の研究を通じて、バウムガルテンの「美的／感性的真理」が、存在論において虚構存在にも認められること、つまりそこでは、現実には存在しない虚構存在に対しても、真なる存在としての存在論的真理が認められている事実に逢着した。そしてそこに、バウムガルテンの「美的／感性的真理」の、伝統的な真理との極めて重大な断絶があることが明らかとなった。そのため、このような虚構存在の存在論的真理が承認されうるようになった理論的背景の解明が急務となった。

そこで、バウムガルテンの存在論が主として展開される『形而上学』を中心に、彼の存在論を特に「世界論」との関係で読み直した。その結果、そこでは、存在論的真理が、論理的真理を根拠として構成されているという重大な事実が明らかとなった。そしてこのような論理的真理と存在論的真理の同一性の理論が、ライプニッツの「汎論理学主義（Panlogismus）」に由来し、ヴォルフを経由してバウムガルテンに継承されたこと、しかも、さらに視野を広げると、この同一性が、論理学と存在論における「可能性」や「可能的なもの」の位置づけの変化に由来することが明らかとなった。そこでこの変化それ自体の可能性の条件、その歴史的独自性を明確化するために、哲学的な「可能性」概念の端緒となるアリストテレスにまで遡り、その展開を、特に論理的真理と存在論的真理という観点から歴史的に検証した結果、両者が同一視される論理の萌芽が中世にあり、そこでは、キリスト教的な神の世界創造という理論枠組みの下での神の「全能性（omnipotens）」の概念が、〈神によって創造可能であったが実現されなかった世界〉という、後の可能世界に繋がる着想を含んでいること、さらにはかかる可能的な世界における存在論的真理の条件が、論理的な無矛盾という論理的真理と関連づけられていった事実が明らかとなった。そしてこのような着想が、ライプニッツの可能世界論、さらにはヴォルフの「可能的なものの学問」としての哲学の再編成へと展開され、論理的真理と存在論的真理との全般的な同一視がなされるようになっていったことが明らかになった。このような思想史的展開を背景として、バウムガルテンにおける虚構存在の存在論的真理の主張も可能になったと結論された（論文：『美学』2017 年）。

（３）上記（１）（２）の研究は、真理の一致説から整合説へという展開に関わるものだが、続けて、真理の明証説に即した「美的／感性的真理」の成立条件の研究に移った。「美的／感性的」と訳した形容詞 aesthetica には「感情的」という契機も含まれるが、バウムガルテンの「美的／感性的真理」にも、真理を、従来の研究では十分には注目されてこなかった「真理感情（Wahrheitsgefühl）」として捉える契機が含まれている点に着目し、この事実を、アリストテレス以来の霊魂論に由来する「魂の根底（fundus animae）」という概念に即して実証することを試みた。「魂の根底」概念は、中世においては特にドイツ神秘主義において、非知性的なもの（超知性的なもの）を捉える魂の部分として規定され継承されてきたものだが、17～18 世紀にかけて霊魂論が近代的な心理学へと変容を遂げるに従い、近代的な心理学の概念として再規定される。そしてこの心理学的に規定された「魂の根底」概念にも、非知性的なものを端的に肯定するという意味での「真理感情」がその基底に含まれること、そしてこのような「魂の根底」概念が、バウムガルテンにおける「美的／感性的真理」にも継承されていることを概念史的に実証し、以上を、依頼論文でもあるオットーの聖なるものに関する論文の議論の中に組み込むかたちで論述した（論文：『nyx（ニュクス）』2018 年）。

（４）上記（２）の研究の進捗に伴い、15 世紀から 17 世紀にかけて、論理学が、現代論理学や中世形式論理学とは極めて異なるものに変化した事実に逢着した。バウムガルテンは、自身の美学を、論理学からの「類推（analogia）」として構想したが、この事実に鑑みても、バウムガルテン自身が、美学の創設当時に前提としていた論理学の実相を、歴史的に正確に捉える必要に迫られた。そこで、アリストテレス以来の論理学の歴史研究に従事したところ、ルネサンスを境として、論理学が、人間の心から独立に成立しうる形式論理学から、人間の心の構造に基礎づけられた「心理的論理学（die psychologische Logik）」に変貌したこと、およびその理念とその変化の経緯の詳細が明らかとなった。そしてバウムガルテンが前提としていた論理学もまた、このような心理主義的な論理学であった事実、さらにはこのような心理主義的論理学の構想が、（２）で論じた、論理的真理と存在論的真理との同一視の条件の一つを構成している事実も明らかとなった。そこでこれらの研究を概念史的に総括し、（２）を補足する形で、バウムガルテンの美学における論理学的真理と存在論的真理の同一視に基づく虚構存在の存在論的真理の肯定との関係で論文を執筆した。またこの研究を通じて、バウムガルテンが、心理主義的論理学を前提としたことが、彼の美学に、魂の育成と洗練という人間学的な契機を与える大きな契機となった事実などを明らかにした（学会発表：美学会例会 2018 年、論文：『美学』2019 年）。

（５）バウムガルテンの美学は、論理学からの類推のみならず、詩学や弁論術の一般化としても構想されたが、上記（４）の研究を承け、このような論理学と弁論術との関係も、心理主義的論理学との関係に則して歴史的に追跡できるのではないかと考えるに至った。実際に、古代以降の論理学と弁論術との関係を研究したところ、ルネサンスにおいて論理学と弁論術が歴史的にも稀な統合を果たしたこと、さらにはこの統合が、論理学、弁論術、さらには 17 世紀における学問の近代化、つまり学問的方法論の刷新の条件のひとつとなった事実、さらにはそれが、学問を基礎づける真理概念の変容にも深く関わるという事実が明らかとなった。そこで、このような論理学と弁論術との関係性の歴史的変化の変遷とその学問的方法論の刷新への影響関係を、まずはその起点であるルネサンスに焦点をあて、そこでの論理学（弁証術）と弁論術（修辞学）との統合の論理（人文主義における論理学の刷新)、さらにはそれが「弁論術的弁証術」という形で 16 世紀においていかに学問の方法として体系的に方法整備されたのか、さらにはそこから、人文学のみならず、自然科学的な真理がどのように生じたのかをテクストに則して実証的に明らかにした。この研究を通じて、①ルネサンスにおける論理学と弁論術の統合の論理として、過度に形式主義化した中世論理学への批判があり、論理学を、人間の思考に自然な思考の形式に即して再編するという――（４）の研究でも明らかになった――心理主義的論理学という着想が基調となったこと、②論理学が、単なる形式的な論証のみならず、相手の説得という知識の伝達を最終目的とするものとして広義に捉えられたこと、③この弁論術的な目的を最上位とする広義の論理学の形式は、一見すると説得といった外在的契機を厳しく排除することで生じたように見える 17 世紀以降の自然科学における真理の論証にも適用されていったこと、それを前提として、近代の自然科学的な学問的方法論が整備されていった事実などが明らかになった（学会発表：上智哲学会 2019 年、論文『哲学論集』2020 年（掲載決定))。そしてこのような、ルネサンスを起点として生じた論理学や弁論術といった学問の方法論における再編成・地殻変動が、どのようにしてバウムガルテンにおける論理学と弁論術の統合としての美学の構想へと繋がっていったのかという問題を研究する段にいたった。それをうけて、美学が、文法・弁論術・論理学からなる伝統的な「自由七科（artes liberales)」の３科の拡張としても構想されていた点なども加味しつつ、現在研究を進め、新たな論文の執筆を計画している。

（６）研究目的の（２）にあたる、バウムガルテンの美学の実践的継承に関する歴史研究は、以上のような（１）の目的に相当する研究が予期した以上の広がりと展開を見せたことなどにより、大きな進展を示すことがなかった。研究を進める中で、この目的に関わる先行研究を幾つか発見し、それを手がかりに、本邦にて可能な限りでの一定の調査は開始したが、実地調査を開始することはできなかった。

総括：以上を総括すると、①バウムガルテンにおける「美的／感性的真理」という新たな真理概念の可能性の条件として、学問における真理条件が、原理からの純粋な形式的論証を根拠とする厳密な論証的真理から、確率・統計的に構想・再編された蓋然性・真実らしさへと拡張されたこと、②「可能的なもの」に関する真理が学問的真理として承認され、哲学の基礎概念に置かれたこと、③真理の根拠として、魂の根底に由来する「真理感情」が、近代学問においても心理学において再規定され承認されたこと、④虚構存在の存在論的真理が可能になるために、論理学的真理と存在論的真理との同一性が主張されるようになったこと、⑤論理学の心理主義化により人間の感性に関わる真理が可能になったこと、⑥ルネサンス以来の論理学と弁論術の統合が、論理学的真理と弁論術的真理を統合する形での美学における「美的／感性的真理」を可能にしたことなどが主として明らかとなった。本研究の方法は、「美的／感性的真理」の成立条件を、真理の一致説、整合説、明証説という３分類に則して体系的に検討するというものであったが、研究の進捗を受けて、このような分類は、意想外に複雑に絡みあい、截然と区別されえないものであることが明らかとなった。むろんこの方法的分類は常に意識し、問題の切り口の役割は果たしたが、複雑な歴史的変遷は、むしろこのような一般的な真理区分それ自体の理論的な不十分さを明らかにしたとも言える。また、①～⑥の変化は、巨視的に整理するならば、①知性的真理から感性的真理へ、②論証的で厳密で絶対的な真理から、確率・統計の論理に基づく蓋然的真理・真実らしさへ、③様相論的に見るならば、現実的で必然的な真理から可能的な真理へという、近代における３種の真理の拡張現象を示しており、まさしくこの拡張現象こそが、「美的／感性的真理」が成立するための可能性の条件の中核を占めているといえよう。また、さらにそのより深い背景には、学問の方法論の基礎となる論理学それ自体の変化があり、その変化が――ルネサンスの人文主義を起点として生じたという点からも明確に示される通り――論理学における思考のあり方を、人間の思考のあり方から乖離した形式主義から、人間の思考の自然な形式・構造に適合させるという、人間主義的ないし心理主義的な理念が可能にしたとも言える。これは、バウムガルテンの美学の人間学的な側面を新たに浮き彫りにするものでもある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 桑原俊介	４．巻 25
２．論文標題 フィクションの受容可能性におけるパラダイム変化：真理の一致説から整合説へ――古代から近代にかけての「真実らしさ」概念に即して	５．発行年 2017年
３．雑誌名 シェリング年報	６．最初と最後の頁 60-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32297/schellingjahrbuch.25.0_60	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 桑原俊介	４．巻 250
２．論文標題 バウムガルテンの美学と形而上学における虚構の真理――可能的なものの存在論をめぐって――	５．発行年 2017年
３．雑誌名 美学	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20631/bigaku.68.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 桑原俊介	４．巻 5
２．論文標題 オットーの聖なるものと魂の根底（Fundus Animae, Seelengrund）――ドイツ神秘主義と近代認識論（心理学・論理学・美学）の系譜から	５．発行年 2018年
３．雑誌名 nyx（ニュクス）	６．最初と最後の頁 50-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 桑原俊介	４．巻 255
２．論文標題 論理学における心理主義と美学の成立――一六世紀から一八世紀中葉にいたる心理主義的論理学の展開にそくして	５．発行年 2019年
３．雑誌名 美学	６．最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桑原俊介	4．巻 49
2．論文標題 弁論術的弁証術――ルネサンスにおける弁論術と弁証術の統合とその歴史的位置づけ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 哲学論集	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 桑原俊介
2．発表標題 フィクションの受容可能性におけるパラダイムの変化――近世から近代にかけての「整合性」と「真実らしさ」に即して
3．学会等名 第25回日本シェリング協会（招待講演）
4．発表年 2016年

1．発表者名 桑原俊介
2．発表標題 バウムガルテンの美的真理と形而上学的真理――可能的なものの存在論をめぐって
3．学会等名 第67回美学会全国大会
4．発表年 2016年

1．発表者名 桑原俊介
2．発表標題 詩学と美学における真理と真実らしさ――模倣説と創造説、一致説と整合説、現実説と可能説
3．学会等名 東京女子大学模倣世界研究会（招待講演）
4．発表年 2017年

１．発表者名 桑原俊介
２．発表標題 ヴォルフの論理学とバウムガルテンの美学における心理主義と自然主義――近世以降の論理学の歴史的展開に即して――
３．学会等名 平成30年度第4回美学会東部会例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 桑原俊介
２．発表標題 弁論術的弁証術――ルネサンスにおける弁論術と弁証術の統合とその歴史的位置づけ
３．学会等名 上智哲学会第91回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考